



# 我が領地



川崎ゆきお

「最近領地が減った」

「大名ですか」

「領主ではないが我が町や我が里などがあつた。我が店や、我が通りもね」

「行動範囲が狭くなったということですね」

「まあそうだ。昔、旅行に行ったときの写真を見ていたんだがねえ。よくあんなところまで行ったなあと、思うよ」

「秘湯とか」

「山奥にある行者の宿だ。まあ、車があれば行けるんだろうが、あの細くて、くねくねした道は、プレッシャーだろうなあ。勾配もきつい」

「車で行かれたのですか」

「いや、駅から小さなバスが出ていてねえ。一応観光地だから、そこそこ同乗者はいたよ」

「写真を見て、それを思い出していたのですね」

「バス停があつてねえ。山道沿いにぽつりと一軒だけ古い家がある。停留所名は、その農家の名  
字だよ」

「その家族しか、乗り降りしないんですか」

「そこから溪谷に降りられるので、釣り人とかがいるかもしれない」

「はい」

「当然、その停留所は通過だよ。これで、農家が消えれば、停留所も消えるんだろうねえ」

「終点は行者の宿ですか」

「その宿で泊まって、山に登るんだ。山伏姿でね。半分は団体さんだ」

「行ってみたいです。僕も」

「一緒に御山に登る必要はない。鍾乳洞や怪しげな神社もある。あとは豊かな自然かな。溪谷の水がおいしい。だから、ご飯がおいしい。あれは、あの水で炊いているんだろうねえ。あんなおいしいご飯を食べたのは生まれて初めてだった」

「水が名物だったのですか。名水とか」

「それほどでもないけど、豆腐もうまかつたなあ。やあり水がいいんだ。ああ、しかし、そういう話じゃない」

「行者の話ですか」

「そうじゃない。もうあんなところは遠くへ行ってしまったなあと、思うんだ」

「はい」

「その行者の宿が気に入ってねえ。夏場は避暑も兼ねて毎年行っていたよ。だから……」

「え、だから」

「我が領土だった。あの里は」

「はあ」

「飛び地だね。そういう領地は。まるで自分の里のように思えた。そういうのがまだ二三あつた  
ねえ。海なら我が浜とかもね。さすがに我が海とまではいかないが」

「そういう我が何とかというのが減ってきたと」

「そうなんだな。領地が減ったよ」

「また、行かればいいじゃないですか」

「郷愁や、懐かしがってじゃ駄目なんだ」

「過去に生きるということですからね」

「それはそれでいいんだけど、やはり出掛けるのなら初めてのところがいい。新鮮だね。近場で、また小さな領地を見付けるとするかな」

「はい」

「雑談になったねえ」

「いえいえ」

了